

〔研究ノート〕

チベットにおける葬送儀礼

小野田 俊 蔵*

チベットの葬制についての記述は古くは Waddell の *The Buddhism of Tibet or Lamaism* (1895) 489頁や、あるいは Chandra Das の *Journey to Lhasa and Central Tibet* (1902)139頁、更には Bell の *The People of Tibet* (1928)286頁に述べられている。これらの記述を総合すると、チベットの葬制としては、火葬 (me-sreg-gtong-ba) ・鳥葬 (bya-gtor) ・水葬 (chu-gtor, あるいは nya-gtor 魚葬) ・土葬 (sa-sbas-gtor) の四つの方法が従来行われてきたようだ。

phung po ri rtse'i rgod la ster, yang na chu nang nya la sbyin

(亡骸は山頂の禿鷹に与えるか、或いは川の中の魚に施せ)

という諺がある。ワッデルの前掲書には、ヤムドクツォ (湖) 周辺での水葬の様子が写真とともに報告されているが、一般に言われる所では、火葬は高位のラマ及び貴族、鳥葬は一般のチベット人、水葬は極貧者、土葬は 'brum-nad (天然痘) とか mdzes-nad (らい病) 等の伝染病 ('gos-nad) による死者の場合とされている。

チベットで鳥葬や魚葬を行う理由は様々に議論されてきた。火葬するには燃料に乏しい、という事実はあるにせよ、宗教的な意義がなければこれほど一般化するとは思われない。飢えた動物の為に死人の肉体を与えるその習慣の中には、彼らが肉体に対する執着よりも、魂の安らかなる再生を強く望んでいることが読み取れるであろう。永續し再生していく魂がそれまで借りていた肉体を布施する行為により、幸せな報い、すなわち来世での果報を受けることができるという原則がまさしく疑いもない事実として受けとめられ彼らの文化を形作ってきたのである。

1974年にインド北部ヒマチャルプラデーシュ州ダラムサーラから *Bod pa'i 'das mchod* (英題 *Tibetan Dead Ceremony*) と題する書籍が出版された。本文33頁の小冊子である。本文はすべてチベット語で書かれている。著者のトゥプテン・サンギェー氏は、同地のチベット図書館 Library of Tibetan Works & Archives 民俗文化研究

* 佛教大学文学部助教授、佛教大学総合研究所嘱託研究員 (平成4, 5年度)

室の室長として活躍されていた人物で、本書の他にも *Festivals of Tibet* 等、数冊の興味深い書物を著しておられる。氏は本書でチベット人の葬儀に関する民俗習慣の叙述を鳥葬に代表される葬送のみに限定せず、死亡前の臨終の時 'chi-kha から年忌法要 lo-mchod に至るまでを順序を追いながら概説されている。本稿では以下、氏の記述に従いながら、興味深い部分を抄出しつつ読み進めてみることにする。

臨 終

臨終 'chi-kha (チカ) へと近づいた病人に付き添う者は、その病人がいよいよ口をきけなくなってしまう前に遺言 kha-chems を聞いておかねばならない。それと同時に衣服などに用いられている毛皮の類を外に出す。そして病人に末期の水を与え、リンセル rin-srel (高僧の聖遺物の小片) を加えた末期の食をとらせるのである。やがて、病人は口をきけなくなる。付添いの者は病人の耳元に口を近づけて、その病人がふだん信仰しているラマの名や守護する神仏の名をささやきながら、それらを「念ぜよ。念ぜよ。」と、病人の最後の精神力に訴えて、瞑想を勧めなければならない。病人の心を安静にし清らかな往生をとげさせるためにはこの時、病人の子供や配偶者を病床に近づけてはならないとされる。そして病人は安らかに息を引き取るのである。この臨終の記述でチベット語文献は、チウク (phyi-dbugs, 外息) とナンウク (nang-dbugs, 内息) という表現をする。外息が観察されなくなってから後の微弱な内息のある期間が、重要なのである。

葬儀の準備

死亡の後、ボワ 'pho-ba (遷魂) の儀式がすむまでは何人たりとも亡骸に手をふれてはならない。遺族や知人たちはすぐさま、僧侶を招いたり、その他必要な諸々の行事の準備にとりかかる。亡骸の横たわる床の近くには枕飾りとして、故人の使っていたお碗に食べ物を入れたものとバター油の灯明とを置くようだ。悪霊を払う役目をもつといわれるこのバター油の灯明は決して絶やしてはならない。遺族は喪をあらわすために、結髪を解き、髪紐をはずし、洗顔をせず、装飾品をとりはずし、着古した黒い服を着ける。これらはゴトゥ mgo-'khru とよばれる喪明けの日まで続けられる。また、四十九日が過ぎるまでは歌舞を慎まねばならない。死亡からボワまでの間のこの時点で、ギョクゴ mgyogs-bsngo とよばれる追善供養がおこなわれる場合がある。

この供養には、タンカあるいはツァカリとよばれる仏画が寺院に奉納されることが多い。ギョクゴ（急ぎの廻向）の名が示すように、その人の死後すぐ、初七日のうちに描かれなければならない。この期間は新亡がまだ次の生へと入っていないと信じられている時である。この目的で描かれるタンカは、ケータク *skyes-rtags* 「〔良き〕転生の兆し」と呼ばれ、それらは亡くなった者の名前で注文され、死者を良き転生へと送り出し、向かわせるために、必要な条件を創り出すことを意図したものである。ラマ（師僧）がそのタンカに最も適切な尊像を決定する。普通、チベット仏教の占察の文献を参照するが、しかし時には、直接的にラマ僧自身が死者の魂・個性を洞察する事によって決める場合もある。また、悪趣への輪廻を断つという意味で、『悪趣清浄タントラ』のマンガラを奉納する場合も多いと聞く。

亡骸を葬送するまでの間はギンパ *rgyun-pa* とよばれる役目の比丘たちを家に招いて昼夜を問わず請願文を唱えてもらい、故人の罪障消滅のための法要を行ったり、護摩を焚いてもらったりして過ごす。ある文献によれば、北方の遊牧民の中には亡骸とギンパのみを残して別の場所に家族全員で身を移す習慣のある地方もあるという。

亡骸には手をふれず動かしてはならない。ラマが行う正式なポワの儀式以前に手をふれると、手をふれたその部分から魂 *rnam-shes*（識）がさまよい出てしまう。ポワの儀式はラマによって執り行われるが、身分の高いラマの場合には直接足を運ばずに遠くから行う場合もある（これをギャンボ *rgyang-'pho* という）。このポワの儀式については諸宗で様々な伝承があるが、要は故人の魂を亡骸からぬき出して浄土へと引導し、悪趣への輪廻を断つための儀式ということが出来るだろう。

ポワ（遷魂）

ポワとよばれる修行体系は様々な宗派で様々な体系の中に組み込まれているが、初期の形は実際の葬法とは別の、一連のヨーガの修法の一部をなすものであった。ここでポワの修行全体について概観を得ておきたい。

チベット仏教が導入した仏教タントラの一般的理解では、意識 *rnam-shes* は体内の脈管（ナーディ）を流れる風 *lung*（ルン）として理解されていた。ルンは左右中央の三本の脈管の内中央の脈管を通して上昇し、頭頂にある梵穴から抜け出した場合にのみ浄土へと達するのであると考えられた。三本の脈管とは中央がドゥーティー（チベット語でウマ）、左にララナー（キャンマ）、右にラサナー（ロマ）と称される。この三本の脈管は四或いは五箇所で見え交差しており、そこにチャクラ（輪）と称さ

れるものがある、最後期のカーラチャクラタントラでは六輪説になるが、一般的には四輪で、眉間に三十二葉の弁の大樂輪、喉に十六弁の受用輪、心臓に八弁の法輪、臍に六十四弁の変化輪、合計四箇所と考えられている。中央の脈管を上昇するルンは心滴ともよばれるが、精液と考える伝統もある。つまり精液と心は同一視されるのである。頭頂の梵穴は非常に微細な穴であるが通常の身体他の穴、つまり九孔（両眼・両耳・両鼻・口・肛門・尿道口）から心が出た場合は浄土に転出したり解脱したりすることはないと考えられている。上半身の孔から出た時は三善趣に、下半身の孔から出た時は三悪趣に再生する。このような意識転移をポワとよぶのである。

カーギュ派の修行体系の中に「ナーローの六法」とか「ニグの六法」とか呼ばれるヨーガの技法が伝承されているが、その中に中有の修行とポワの修行の二法が含まれている。すなわち中有もポワも生前に修行される為のものであって本来は葬送儀礼での役割が主ではなかったと思われるのである。中沢新一氏とケツンサンボ師の共著『虹の階梯』によれば、ニンマ派でのポワは「マゴム・サンギェ ma-sgom-sangs-rgyas（長い瞑想修行を必要としない悟りの教え）」という体系の中のものとして位置づけられているという。そしてその体系自身もニンマ派の中心教義であるゾクチェン教義の一部をなすものであるという。ニンマ派ではポワは五種に分類される。即ち、「法身のポワ」「報身のポワ」「変化身のポワ」「凡夫のポワ」そして「死者のポワ」である。この内で前三者は特別に能力を持ち合わせた修行者によって修されるものであって、それを持ち合わせない者の為に「凡夫のポワ」と「死者のポワ」がある。少し長くなるが、中沢氏の記述から臨終行儀としてのポワの手順を引用して書き出してみよう。

「臨終を間近にひかえた者は、まず感覚がしだいに衰弱してくるのをおぼえるだろう。人の話し声がウル・ウル・ティル・ティルという風のうなりにしか聞こえなくなって、どんな意味をしゃべっているのかわからなくなってしまう。それに視覚も衰弱して、あたりを見まわしてもそこに何があるのか、もうわからない。こうして聴覚、視覚、臭覚、味覚、触覚と次々に感覚がうすらいでいく。五感の衰弱していくこの時こそ、ポワを行なうには最適である。死にゆく者の耳に筒をあてがって、ラマや行者が大きな声で死者に死の意味を説き、「死者のポワ」を行なう時だ。この時はまだ〈心滴〉は中央管の中にいて、つかまえやすい状態にある。

次に、身体が地、水、火、風という四つの物質界のエレメントに分解しはじめる過程がはじまる。肉が地のエレメントに溶解しはじめると、重いものに押しつ

ぶされているような、あるいは深い穴に落ちこんでいくような惑乱をおぼえるだろう。血は水のエレメントに溶解する。鼻と口から汁が流れでるのは、この分解過程がはじまったしるしである。体温は火のエレメントに溶解するから、この時、口や鼻が渇き、人によっては頭頂から水蒸気みたいなものがシュルルとぬけていく。息は風のエレメントに溶けこむ。

さまざまな種類の風がすべて生命維持の風の中に集まってしまうから、息を吸いこむのが難しくなる。ここで人は三度長い息を吐き出して、息絶える。普通いわれる死である。 ～中略～

息が絶える時、人の頭頂から白い雲が降下してくる。これは父親から受けたものだ。すると頭上のすみわたった空間に、月の光のような白い道がこちらに向かってあらわれるのがわかる。死者の知は鮮明になり、すべての瞋りが消えていく。へそからは母親から受けた赤い血が上昇してくる。この時、空には日の光を思わせる赤い道があらわれ、死者の知は大楽にみたされ、すべての貪りが消えていく。降下する白い雲と上昇する赤い血は胸のチャクラの位置で出会う。

この時、空にはまっ黒な道がひとすじあらわる。分別する知が消え去って、あたりはまっ暗な闇におおわれる。それから、しだいに昏迷した意識が晴れてきて、まるで雲がきれて青空があらわれるようにして、清明な空間には光がみちてくる。……」¹⁾

死者のポワが与えられた後、人々は遺骸の頭頂部に穴がみつからないかと点検する。つまり穴が発見されれば、確かに彼は良き再生を得たことになるからである。

野辺送りの準備

葬送の日取りは占いによって決められるため、遺族は故人の干支（えと）と死亡の日時その他を紙に詳細に書き出し、うらない師のもとへ赴いて占ってもらわねばならない。もし悪いきざしが占いに出た場合には悪霊払いのためにその占い師を家に招く場合もあるという。反対に守護霊守護神が身体に未だ存続している場合もあるので、注意を要する。

次に亡骸に湯灌をほどこす。チベットでは鳥葬を行うため湯灌は特に重要視されるのである。請願文を唱えている僧たちが小休止している間を見計らって亡骸を湯船（gzhong-pa）に入れてサフラン（gur-kum）などの香料を入れたぬるま湯でよく

1) 中沢新一、ケツンサンボ共著『虹の階梯』平河出版社、1981.

洗い、清浄な布で拭く。普通石鹸等は使わないとされる。そして男性の場合には男根の先を布切れや紐で縛り、口と肛門とにバターで栓をする。女性の場合には局部もバターで詰める。それからティルジャン sgril-byang とよばれる経験者と協力して亡骸の足を揃えて折り曲げ、しゃがませて、その形のまま草で作ったロープで固く縛り上げなければならない。葬送の日まではその亡骸を白いシートでくるんで、家の隅のレンガを敷きつめた場所に安置し、dbang-rdzas-rigs-linga と呼ばれる供物等を前にお供えて、カーテンを吊るしておく。その時けっして地面の上に直接置いてはならない。置いたその地が墓所となって後に遺族の中から死者が多数であるという俗信があるからである。草紐で縛る理由のひとつは蘇生をふせぐためであり、また、葬送の場所まで運びやすくするためであると説明される。また、火葬する場合でも煙が出にくいという特徴があるという。これらの風習はチベットの中でも多様で、イスラム教徒や漢族、ネパール人では、様子が全く異なるという。

葬送がなされるまでは、この遺体の傍に犬や猫を近付けてはならない。それらの毛が誘因して幽霊が出ると信じられているのである。

この時点で、本格的な供養が行われる。金銭と供養物そして廻向文である。廻向文は親族から手本を借りて浄書せねばならない。また、供養の金銭を配る場合には、表に skar-me'i-zhal-'debs と書いた紙で包み、カタ（儀礼用の白い布）と共に差し出すが、カタは忌中用の特別な折方である必要がある。

葬送の前日（カルメ・ゴェシ）

うらない師に決めてもらった葬送の日の前日をカルメ・ゴェシ skar-me-dngos-gzhi とよぶ。この日は午前中のうちに故人の知人たちが集まって、灯明に使うバターの入ったやかんや線香などを用意して、近在の寺々におまいりをすませ、乞食に施しをしたりして善根を積み、その後に最寄りの寺にツァムチュ・レティ mtshams-gcod-ral-gri とよばれる魔除けの守り刀を奉納する。同日参加した知人たちは、その日は故人の家を再び訪問してはならない。夕刻にはそれまで昼夜を問わず請願文を唱えていた僧侶たちもお布施をうけとり寺へ帰っていく。

一夜明けた葬送の日は夜明けの寅の刻、三時から五時ごろに野辺送りの行列が出発する。チベットではかつてペブジャン phebs-byang というみこしが使用されたが、最近では四角い机を上下逆にして、左右に担ぎ棒を通してしっかり結わえたものが使われるようである。その中に亡骸を移し、供物をして、家族や親族の者からそれぞれ

儀礼用の白い布（カタ）がささげられて出発の時を待つ。門前には香煙が大きく立ちのぼっている。みこしが門を出ると、みこしの方角を決めるために占いをたてた後、亡骸をまず香煙のところで右に三回、左に三回まわして出発する。

行列が村を出てしまうと知人たちはそれぞれの自宅にもどるが、彼らは昨日同様この日も故人の家を訪れてはならない。或る文献によれば、葬送の途中で雪に降られた時は、縁起が悪いと言って嫌われるという。道中は決して途中で休んではいけない。もしみこしを地上に置くようなことになってしまうと、その地にいろいろな災いがおこるといわれている。葬場に到着しても直接地上に置いてはならず、必ずレンガを敷きつめてその上にしばらく安置する。休息のためみこしの担ぎ手にはお茶と麦粉がし粉と肉の三品をふるまう習慣があるという。高い身分の人の葬儀ではここで、比丘を招いて請願文を半時間ほど唱えてもらうようだ。さて、これらがすむといよいよ鳥葬に入る。

鳥 葬

まず鳥葬が行われる葬場には、香煙が焚かれる。みこしから降ろされた亡骸はうつ伏せにされて最初に背面の肉がナイフで捌かれる。次に亡骸を仰向けにして胸部や腹部の肉を捌いていく。葬場は普通大きな岩の上に作られているが、そこに石で作った杭が立っているから、それにロープで亡骸を結び付けておく。これは秃鷹がついばむ際に亡骸が散乱するのを防ぐためである。この平たい大きな岩の葬場は、キンコル dkyil-'khor 即ちマングラと呼ばれ習わされている。捌かれた肉に秃鷹が上空に集まってくる、降下しながらついばんでいく。秃鷹の中にボスがいる葬場では、ボスが三切れか四切れをまずついばみ、それを食べ終わるまでは他の秃鷹は決して口をつけないという。集まって来る秃鷹は、この時は人間を全く恐れないので、勇気のある者は近付いて行って羽を採取して、後で着色してテペ the-spe と呼ばれる遊具にして売る者もいると言う。

やがて大方の肉を秃鷹が食べ尽して骨が露出した状態になってしまうと、次に頭蓋骨の処理に移る。ラムなどがこの頭蓋骨を特に必要とする時は残しておくが、その他の場合は石で打ち砕き、内部の脳を食べやすくして再度秃鷹に施すのである。このときは細かく皮や骨を砕き脳と混ぜ合わせて、更にツェンバ（麦焦がし粉）を撒いて置く。秃鷹は再度集まってくる。残った髪の毛は葬場のわきで燃やして処理をする。

亡骸の処理を担当した人は近くの水場で手や顔を洗ってから、お茶と麦焦がし粉と

チーズを食べて各々の家に帰るが、この人もその日は故人の家を訪れてはならない。葬儀に使ったレンガやその他の道具は川へ流すかあるいは遠くの地に埋めてくる。一方葬場では二・三人の比丘に経文を唱えてもらった後にお布施をわたして引き取ってもらう。

以上が鳥葬儀のあらましであるが、チベットではこの他に火葬の場合もあり、水葬や土葬の場合もある。火葬の場合は火葬場で必ず故人の兄弟が亡骸の頭部から順に焼かねばならないとされる。

喪 明 け

遺族の喪が明けるのは普通一週間ほど葬送の日から後になる。ゴトゥ mgo-'khrū (洗い初め) とよばれるこの喪明けの儀式の日取りもやはり占いによって定められるようだ。喪にふくしていた遺族がずっと洗顔や洗髪をしていなかったのもこのような呼称がある。この日の洗顔や化粧に使用される髪油や櫛などは新品に取り替え、古いものは遠方に捨ててくる。この日から服装も元通りになおしてよい。

中陰法要と年忌

初七日の法要は故人が死亡してから七日の後に行われるが、日数の数え方は死亡時刻によって少々異なってくる。すなわち、死亡時刻が午前中であったなら死亡日を合わせて七日目に行い、午後であったなら死亡日を除いて七日目、つまり死亡日を合わせると八日目に行われるという。この初七日にはじまる中陰法要のうち、二・七日と三・七日、五・七日と六・七日はそれぞれ同一の法要が行われる。四・七日の法要は他の週よりも重要視され、この日までにはほとんどの魂が再生を受けると信じられているようだ。中陰明けの四十九日には故人の知人なども集まり、大々的な法要が執り行われる。比丘たちには種々の贈答品が贈られ、また葬儀全体を通じて世話になった人々には、お茶やお酒をふるまって労をねぎらうという。

一年の後には一周忌の法要が行われ、その後毎年命日には年忌法要 lo-mchod が行われる。これらの法要の意義は追善ではなく、葬儀の際の引導や諸供養によって故人が善趣への再生を得たであろうことに對する、よろこびと感謝の宴であるとされることは特記されるべきであろう。